

構文理論——その背景と広がり

大 堀 壽 夫

1. 言語的知識としての構文

言語を研究する上での根本的な関心の一つは、われわれが持つ言語的知識とはいかなるものかという問いである。こうした問題に対し、狭義の生成文法（仮に Chomsky 理論と同義とする）ならば、文法の一般原理プラス語彙的知識というのが大方の答えだろう。

しかし、こうした見方に立った場合、二つの問題がある。第一に、文法の限られた領域に研究が集中するため、包括的な記述が関心から外れるという点、第二に、文の適切な解釈のために必要と思われる情報が十分に考慮されないという点である。

このことを次の例——仮に相関条件文と呼ぶ——をもとに考えていこう (Fillmore 1988)。

- (1) The sooner you learn how to pronounce her name, the more likely is she to go out with you.

この文には次のような特性が見られる。a) *the* + 比較級を二つ並列した形が条件文をなす (例えば前件にあたる節には未来のことでも *will* が生起しない)、b) こうしてできた文は二つの尺度の相関を表す、c) 接続詞なしに複文が成立している、d) 後件の節でのみ主語と助動詞の倒置 (*the more likely is she...*) が可能である。

興味ある特性はこれだけではない (McCawley 1988)。次の例からもわかるように、e) 一定の制約のもとでは *be* の省略が可能である。

- (2) a. The more outrageous a politician's promises are/ \emptyset , the bigger his vote count is/ \emptyset .
b. A politician's vote count is/* \emptyset bigger, the more outrageous his promises are/ \emptyset .

前件—後件という順の (2a) ではどちらでも *be* の省略ができるが、後件が文頭に配置された文 (2b) では、その中の *be* は省略できない。また、省略可能な *be* は一般的言明を行うコピュラに限られる ((2a) でも *a politician* が *Fred* であれば *be*

は省略できないし、*be* が分詞をとともなう助動詞の場合も省略は不可能である)。

さらに、f) 否定は文頭に配置された後件についてのみ認可される。

- (3) a. John doesn't get angrier the longer he waits.
b. *The longer John waits, the angrier he doesn't get.

後件が否定された時の可能な解釈は、「ジョンはこれ以上待っても、怒りが増すことはないだろう」という譲歩を含んだものである。

以上の事実が、狭義の語彙や文法規則で捉えきれないことは明らかであろう。(1)–(3) を「周辺の」と片づけて考慮から外すのは、恣意的に過ぎる。倒置、省略、否定といった現象への制約を見ればわかるとおり、相関条件文が重要な問題を提起することは間違いない。

ここで取るべきは、妥当な言語理論とは a)–f) のような特性を含む包括的な記述を可能とし、文の解釈に必要な情報を規定するものだという立場である。注意すべきことに、上の例では部分の意味を加算して全体の意味を作り上げる構成性の原理が機能していない。「条件文」という特性は文の形全体と結びついたものである。このように、一定の構造をもった句や文が慣習化された意味をもつケースは非常に多い。文法の一般原理でも語彙的知識でもない、形と意味との慣習化された統合体を構文 (construction) という。広範囲の言語事実を適切に扱うためには、こうした分析上の単位を設定することが必要である。

構文という分析上の単位は、「中核的」と思われる現象についても有効である。次の例文を見よう (Lakoff 1986, Culicover and Jackendoff 1997)。

- (4) John hit Bill and kicked Sam.
(5) *Who did John hit Bill and kicked \emptyset ?
(6) John went to the store and bought coffee beans.
(7) What did John go to the store and buy \emptyset ?

A and B という構造の一方の要素、すなわち A

または B だけを WH の形で「移動」させることは等位構造制約により不可能とされる。(4) から (5) を導くことができないのは、そうした理由による。ところが (6) に対応する (7) では WH による「移動」が認可されている。このようなケースは二つの要素を結ぶ固定した表現に限られるとする分析は、次の例文のように三つ以上の要素の連結が可能であることから無理である。

(8) How many courses can you take \emptyset for credit, still remain sane, and get all A's in \emptyset ?

等位構造や WH 移動についての制約を「周位的」現象として棄却する者はいないだろう。特定の理論に依拠しなくても、等位構造が習得の初期に現れることを傍証とすれば、「周位的」とする根拠はない。

ここから提起されるのは、統語論と意味論・語用論とのインターフェイスはどうあるべきか、という問題である。統語論>意味論>語用論という流れ作業モデルで考える限り、(7), (8) のような例を認可するためには統語論で排除してしまうことはできない。そのためには、一般原理であるはずの等位構造制約を大幅に弱めなければならないが、これは望ましくない選択である。あるいは、(7), (8) は非文法的なのだが、後付け的に解釈可能な記号列であるとする選択もある。しかし、統語論で排除されたものについて、意味論または語用論での「敗者復活」= 解釈可能性を論じるのは不合理であるし、解釈可能な統語構造は決してランダムに出てくるわけではない。

これより、等位構造という文法の「中核的」な部分についても、構文という単位を導入することの利点が出てくる。例えば、(7), (8) については「同一主体による出来事 of 自然な連続(目的、結果など)」というフレーム的意味をもった構造を設け、その場合には二つ目以降の要素から目的語を WH 要素として疑問文の先頭に配置する形を認可するという処置ができる。同じ等位構造でも、A or B から一方のみを「移動」するのはいかなる場合でも不可能だが、それはこうした意味特性によって説明できる。

この見方からは、文の適格性の判定とは、形式と意味の両面についてのパターンマッチングの操作である。それは文の解釈結果だけでなく、形と意味を結びつけるプロセスをいかに最適化するかという関心からも大きな意義をもつ。統語論の内部では、単線的な派生でなく、複数の制約を同時に

作動させて適格性を判断することが生成文法を含め多くの理論で行われている。構文という分析単位を取り入れるならば、統語論>意味論という流れ作業をとる必要はなく、意味と形式の両面についても、制約の同時適用という扱いが可能である。

以上の立場を改めてまとめれば、次のようになる。

- (9) a. 文法の構成単位は意味と形式のペアである。
- b. 語彙知識と文法知識との間は連続的である。
- c. 「中核」と「周辺」の間に本質的な区分はない。

ここでいう「意味」は文脈上の解釈手続きを含む。われわれの言語的知識は、多様な構文カテゴリーのネットワークである。こうした文法観に立った理論が、構文理論 (Construction Grammar, 以下 ConG) である。

2. 構文理論の沿革

ConG は 1980 年代から University of California at Berkeley の言語学者、Charles J. Fillmore, Paul Kay, George Lakoff を中心に発展していった。Lakoff (1987) と Fillmore et al. (1988) は早い時期の代表論文である。

ConG の立場と生成文法との相違は明らかであろう。後者にあつては個別言語の記述は主目標ではない。実際には優れた記述的研究もあるが、生成文法で理論の設計自体がいつそう重要視されるにつれ、素朴に「英文法」を志す人々の間に当惑が広がったことは想像に難くない。1960 年代から 1970 年代初期までならば、構文の概念は「受動変形」のようにその名を冠した変形規則と対応していた。しかし、1980 年代には個々の規則と多かれ少なかれ対応していた「構文」の概念が解体され、一般原理の相互作用として扱われるようになった (例えば Jaeggli 1986)。この観点からは、受動構文であろうと繰り上げ構文であろうと、名詞句の移動という一般的操作と、格標示や θ 役割についての一般原理の組み合わせによって分析される。

結果として、生成文法に対する付加的デバイスとして構文の談話機能を考察するという折衷主義は、言及すべき対象を失うことになった。受動構文の談話機能を論じることはできても、Move- α の談話機能を規定するのは困難である。かつて生

成文法を受け入れながら構文の機能を論じていたユーザーたち——語法研究者、教育関係者、あるいは類型論学者——の多くが理論の尖鋭化とともに「引いて」しまったのは仕方ないことである。

ConG の背景として、このような動向に対する反動があったのは間違いない。包括的な記述を目指すモデルという点では、HPSG (= Head-driven Phrase Structure Grammar) や LFG (= Lexical Functional Grammar) とも共通点をもっている。しかし、初期の ConG はどちらかといえば慣用語法の細かい記述の試みとして見られる傾向が強く (例えば Fillmore et al. 1988 が取り上げたのは *let alone* という語法だった)、開発者の意向とはうらはらに、整備された文法理論として見られることはなかったように思う。

このような状況を決定的に変えたのが、Goldberg (1995, 元になった Ph. D. 論文は 1992) である。1990 年頃から、いくつかの重要な学会で、英語の二重目的語構文や使役移動構文について新しい分析が Goldberg によって提案された。これらの現象は、文の中心となる動詞がどんな項をとることが可能か、という文構造のまさに「中核」に関わる問題であっただけに、広く注目を集めた。同じ頃、LCS (= Lexical Conceptual Semantics) 理論が発展したこともあり、共通の関心をもつ者どうしの間で、学界の水準からすれば健全なやり取りが行われたことも記憶に新しい (Geeraerts 1996)。結果として、ConG はまず、Goldberg による項構造の理論として広く世界に知られることとなった。

ここでは、使役移動構文を取り上げて基本的な主張を確認する。

(10) Frank sneezed the tissue off the table.

英語の *sneeze* という動詞は自動詞とされる。では、経路を表す語をとまなうことで目的語をとることができる、という情報はどうやって表示すべきだろうか。Goldberg の解決案は、意味役割と項のリンクとしての項構造自体を個々の動詞とは別レベルの構文として設定し、文の構造は動詞の情報と構文情報との重ね合わせによって決定されるというものであった。構文情報はいわば一種の鋳型 (テンプレート) として、場合によっては動詞の意味構造を改変する効果も持つわけである。

1990 年代にはこの他にも、UC Berkeley で ConG の発想に立つ博士論文がいくつも生み出

された。日本語に限っても、Fujii (1993), Ohara (1995) がただちに挙がるし、Matsumoto (1997, 元となった Ph. D. 論文は 1987) も ConG の理念を受け継いでいる。Hasegawa (1996, 元になった Ph. D. 論文は 1992) は RRG (= Role and Reference Grammar) と ConG 両方の利点を生かした研究である。1994 年の Berkeley Linguistic Society は 20 周年記念大会であると同時に、Fillmore の 65 歳を記念して構文研究の特集となった。この時に企画の進行が明らかにされた記念論集は、Shibatani and Thompson (1995, 1996) として本になった。その後、Michaelis and Lambrecht (1996) や Kay and Fillmore (1999) といった論文が *Language* 誌に載るなどして、ConG はしだいに広く知られるようになった。1999 年と 2001 年の国際認知言語学会では ConG のセッションが企画された。2001 年には UC Berkeley で ConG についての国際会議が開かれ、日本国内からも 5 名の発表者 (岩田彩志、大堀壽夫、小原京子、根本典子、藤井聖子) があった。成果の公刊が待たれる。

3. 構文理論の方向性

生成文法とは異なり、ConG は複数の開発者が異なった立場から推進しているので、「万世一系」のものではない。Fillmore と Kay が本格的な共同作業を進める一方、Lakoff は独自の関心をもって研究を行っており、ConG は初期においてすでに——基本理念は共有しつつも——複数の方向性をもっていた。Fillmore-Kay は、主流の理論と肩を並べられるような文法理論の構築を主目標としている。技術的には、単一化 (unification) という計算上のメカニズムによるという点で、HPSG ときわめて近い。この意味で、Fillmore-Kay 版の ConG は「生成的」かつ「形式的」である。一方、Lakoff 版の ConG は一貫して神経回路モデルによる実装を念頭においており、旧来の意味で「形式的」たることを目指してはいない。Goldberg をはじめ、後に続く研究者たちは、実装可能性についての議論はそれほど深めてはいない。多くの場合、構文という概念をとることで言語現象がどのように新たな形で見えてくるか、そして意味の違いを適切に捉えるにはどうすべきかという問題意識からの取り組みが主である。

認知言語学との関連を見ると、Fillmore-Kay

版の ConG は伝統的な文法理論の概念を多く利用しているという点で若干の隔たりがある。もちろん、Fillmore が提示してきたフレーム意味論は ConG の意味部門を構成しており、その点では間違いなく「認知的」である。これに対し、Lakoff 版の ConG は構文のプロトタイプやメタファーによる構文の拡張を中心的に論じており、「認知的」アプローチの本道にあるといつてよい。さらに、Langacker 理論においてとられる「記号体系としての文法」という考えは意味と形式の統合体としての構文の概念と高い親和性をもつ。また言語的知識がそのような単位のネットワークであり、規則によって文を派生する必要を認めないという点では、「使用依拠モデル」(Langacker 2000)によってより堅固な基盤が与えられると思われる。

ConG の興味深い方向性の一つは、語用論とのインターフェイスである。発話の解釈のためには、Grice 流であれ、Sperber-Wilson 流であれ、何らかの一般原理が必要なのは確かである。だが同時に、われわれは言語表現のもたらす解釈のための情報を常に参照している。それは個別語用論とでも呼ぶべき分野に属する。例えば、*let alone* は「後続する語句の表す内容を尺度の下方に配置するような比較のモデルを構築せよ」という指定を言語使用者に与える (Fillmore et al. 1988)。このモデル内では、A *let alone* B の A が真ならば B も真であるという含意の関係が成り立つ。次の例では、昼食をとるということと朝食を作るということが比較されている。

- (11) I barely got up in time to eat lunch, *let alone* cook breakfast.

注意すべきは、*let alone* が客観的な現実を映し出すだけでなく、言語使用者に尺度モデルを積極的に構築せしめる効果をもつことである。これは次の例からわかる。

- (12) a. She didn't get to Berlin, *let alone* Warsaw.
b. She didn't get to Warsaw, *let alone* Berlin.

ここでは二つの都市の間に有意義な尺度といえるものは一見したところない。しかし *let alone* の指定する解釈手続きによって、(12a) ではベルリンの方がワルシャワより近く(おそらくは西から東への移動)、(12b) ではその反対であることが理解される。われわれが「文脈から判断する」と

いう時、実際には背景としてもつ知識の中から、ある捉え方のもとに文脈を選択・構成する操作が行われている。Kay (1990, 1992) はこのようなタイプの表現を、文脈操作語 (contextual operator) と呼んでいる。かつて Grice は慣習的含意という名称を提案したが、その内実はほとんど体系化されなかったし、言語理論にどう位置づけるべきかの考慮はなかった。構文は文脈に関わる意味の担い手と見ることが可能であり、発話解釈の一般原理と共に、個別の言語表現がもつ解釈手続きを論じる上で有効な概念である。

加えて最近の展開で特筆すべきは、言語習得のモデルとしての ConG および Langacker の使用依拠モデルへの注目である。これまで習得については、Lakoff ほどの論客でも意外なまでに寡黙であり、まして慎重をもって知られる Fillmore はこのテーマでの論考は事実上なかった。言語習得に携わる者の間では、理論言語学イコール生成文法という固定観念がとかく支配していた。これに対し、Tomasello (1998) は、言語習得に関わる代表的研究者たちからの Goldberg (1995) についてのコメントを集めたものである。言語的知識を構文ネットワークと見るならば、言語習得とは構文の習得およびスキーマ化を通じたネットワーク形成の過程と見ることが可能である。この見方はヒトの生得能力としての言語を否定するものではないが、言語固有の知識の占める割合は生成文法よりもはるかに小さい。Lakoff 版の ConG で強調される構文プロトタイプやそこからのメタファー等による拡張の能力がここでは視野に入ってくる。詳細は Tomasello (2000) に譲るとして、習得についての新しい理論的枠組みを ConG ひいては認知言語学の立場から打ち出したことのインパクトは非常に大きい(この論文収録の号は習得の特集なので、他の論文も参照)。なお、言語習得がすでに存在する普遍的知識の「発見」ではなく、動的に再編成を繰り返しながら行われるという立場は Kajita (1977) によって早い時期に主張されており、その真の意義が理解される時代が今になって巡ってきたと言える。

最後に、言語類型論への示唆についてふれる。普遍文法や言語の類型をボトムアップで追究するならば、出発点となるのは個別言語の構文であり、言語ごとの比較によるバリエーションの考察である。例えば、「主語」の普遍的な定義を求めるよりは、「主語」と結びつけられる特性が言語

ごと、構文ごとにどのように分布しているかを探索する方法が考えられる。そこでは普遍性はバリエーションの中のパターンや意味と形式の相関の中から規定される。Croft (1999, forthcoming) はこうした観点から ConG の発想を大胆に進展させたものである。

4. 結 語

上に述べた他にも、ConG への関心の広がりを示す動向はいくつかの方面で見られる。現時点では、ConG は共通の理念のもとに進められている多方面の研究の集合体というべき状況にある。今後は、一般理論としては Langacker の使用依拠モデルと連携しながら、言語学のパラダイム転換につながることが期待される。Fillmore-Kay 版の形式化は HPSG と合流する可能性が高いが、私見では ConG の意義は統語論自体の扱いよりも、意味論・語用論的な情報を統語構造にどう組み込むかという方法論にあると考えられる。今後は構文という概念を導入することで、より妥当性の高い分析が生み出されることであろう。同時に、ConG の文法観は具体的な言語事実の解明に興味をもつ人々にとってもよりどこを提示していくであろう。本特集を通じて ConG への関心が広がり、生産的な研究態勢が作られることを願う。

5. 本特集について

本特集は、ConG の可能性を多角的に考えるべく、様々な立場からの論考を集めた。まず、岩田氏は多くの英語研究者にとって ConG を知る契機となった Goldberg (1995) の分析を批判的に検討し、今後の方向を論じている。英語の項構造に見られる交替現象や生産性をエレガントに捉えるために構文の概念が有効であることは ConG の魅力の一つだったが、同時に個々の動詞の意味にも注目する必要があることを岩田氏は論じている。次に、藤井氏は ConG の観点から言語習得がどのように捉え直されるかを考察している。上でも述べたとおり、この論考は「生得的普遍文法 + パラメータ設定」というシナリオへの対案が可能かという重要な問題提起となっている。

これに続き、ConG の可能性について三つの異なった立場から論考が出されている。早瀬氏は、上で述べた ConG の発想と Langacker の使用依拠モデルとの関連性と相違点を自動詞の項構

造を例にとって論じている。深谷氏は、コーパス言語学の立場から、ConG との接点について考察を行っている。語法研究の伝統は、精細な記述への関心を ConG と共有しており、今後の協調が期待される。鈴木氏は、生成文法の立場をとりつつ、ConG との相補性および梶田理論とのつながりについて論じている。プロトタイプからの拡張を捉えるには構文の概念が有効であり、かつ現実の習得プロセスを反映するような理論化が必要であるという主張は説得力がある。

なお、訳語についてふれると、ConG は語と文との間に本質的な境界を設けないので、construction は厳密には「統合体」や「構成体」という方が適切である。同じく、ConG についても、文法的知識と語彙的知識との連続性を念頭において「文法」に限定せず「構文理論」で統一した「構文文法」は「文」が続くので審美的な観点からも抵抗がある。

参考文献 (* は基本文献)

- Croft, William (1999) "Some contributions of typology to cognitive linguistics, and vice versa". In: Janssen, Theo & Gisela Redeker (eds.) *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope and Methodology*. Berlin: Mouton de Gruyter. 61-93.
- (forthcoming) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Culicover, Peter W. and Jackendoff, Ray (1997) "Semantic subordination despite syntactic coordination". *Linguistic Inquiry* 28. 195-217.
- Fillmore, Charles J. (1988) "The mechanisms of 'Construction Grammar'". *BLS* 14. 35-55.
- * —, Paul Kay, and Mary Catherine O'Connor (1988) "Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of *let alone*". *Language* 64. 510-28. (再録・Kay 1997)
- Fujii, Seiko (1993) *The Use and Learning of Clause-linkage: Case Studies in Japanese and English Conditionals*. Ph. D. dissertation, University of California at Berkeley.
- * Geeraerts, Dirk (ed.) (1996) "Cognitive Linguistics and Jackendoff's Cognitive Approach". Special issue. *Cognitive Linguistics* 7.
- * Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press. (邦訳・『構文文法論』研究社)
- Hasegawa, Yoko (1996) *A Study of Japanese Clause Linkage: The Connective TE in Japanese*. Tokyo: Kurozio & Stanford: CSLI.

(11 ページ下欄へつづく)

(6 ページよりつづく)

- Jaeggli, Osvaldo A. (1986) "Passive". *Linguistic Inquiry* 17. 587-622.
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a dynamic model of syntax". *Studies in English Linguistics* 5. 44-66.
- Kay, Paul (1990) "Even". *Linguistics and Philosophy* 13. 59-111. (再録・Kay 1997)
- (1992) "At least". In: Lehrer, Adrienne and Eva F. Kittay (eds.) *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 309-32. (再録・Kay 1997)
- *— (1997) *Words and the Grammar of Context*. Stanford: CSLI.
- *— and Charles J. Fillmore (1999) "Grammatical constructions and linguistic generalizations: the *What's X doing Y* construction". *Language* 75. 1-33.
- Lakoff, George (1986) "Frame semantic control of the coordinate structure constraint". *CLS 22 Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory*. 152-67.
- *— (1987) "There-constructions", *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (邦訳・『認知意味論』紀伊國屋書店)
- Langacker, Ronald W. (2000) "A dynamic usage-based model". In: Barlow, Michael & Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based Models of Language*. Stanford: CSLI. 1-63. (邦訳・坂原茂 (ed.) 『認知言語学の発展』 ひつじ書房)
- Matsumoto, Yoshiko (1997) *Noun-Modifying Constructions in Japanese: A Frame Semantic Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- McCawley, James D. (1988) "The comparative conditional construction in English, German, and Chinese". *BLS* 14. 176-87.
- *Michaelis, Laura A. & Knud Lambrecht (1996) "Toward a construction-based theory of language functions: the case of nominal extraposition". *Language* 72. 215-47.
- Ohara, Kyoko (1995) *A Constructional Approach to Japanese Internally Headed Relativization*. Ph.D. dissertation, University of California at Berkeley.
- *Shibatani, Masayoshi and Sandra A. Thompson (eds.) (1995) *Essays on Semantics and Pragmatics: In Honor of Charles J. Fillmore*. Amsterdam: John Benjamins.
- *— and — (eds.) (1996) *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*. Oxford: Clarendon Press.
- Tomasello, Michael (1998) "The return of constructions: review article of Goldberg (1995)". *Journal of Child Language* 25. 431-42.
- *— (2000) "First step toward a usage-based theory of language acquisition". *Cognitive Linguistics* 11. 61-82.

(東京大学助教授)